

きずな

KIZUNA

12 2020年
令和2年

特集

障害のある人

だれもが幸せに
輝く未来へ

12月3日～9日は
障害者週間です。



INDEX

2 「帰る場所がある大切さ」

猪狩 ともかさん

(地下アイドルグループ仮面女子 車いすで活躍するアイドル)

3 「障害のある人の人権」

野澤 和弘さん

(植草学園大学副学長・教授 一般社団法人スローコミュニケーション代表)

4 「ノーマライゼーションの実現に向けて」

中野 泰志さん (慶應義塾大学 教授)

5 「コロナ禍であぶりだされた障害者支援の家族依存」

児玉 真美さん (一般社団法人日本ケアラー連盟 代表理事)

6 「ドローンでチャレンジド(障害がある人)の就労促進を!!」

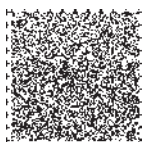
竹中 ナミさん

(社会福祉法人プロップ・ステーション理事長 ユニバーサル・ドローン協会事務局長)

7 「拉致問題は現在進行形」

蓮池 薫さん (新潟産業大学 准教授)

8 情報ぱらざ



ひろげよう
こころのネットワーク

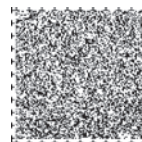
12月号には、音声コードを印刷しています。
専用の読み上げ装置で読み取ると、「きずな」
の内容を音声で聞くことができます。



兵庫県・(公財)兵庫県人権啓発協会
兵庫県マスコット はばタン

障害のある人が就職差別を受けたり、店舗でのサービス等を拒否されるなどの人権問題が発生しています。特にコロナ禍では、マスク着用により口元が読み取れないことや、ヘルパー利用時にソーシャルディスタンスを取ることが難しいなど、障害がある人の暮らしにも不安や困難を感じるが増えています。社会の全ての人々が障害のある人について十分に理解し、必要な配慮をしていくことが求められています。

本号では、障害の有無にかかわらず、誰もが安心して暮らせる豊かな共生社会の実現について考えてみましょう。



特集 障害のある人

帰る場所がある大切さ

地下アイドルグループ仮面女子 車いすで活躍するアイドル

猪狩^{いかり} ともか さん

2年前、強風で倒れてきた看板の下敷きに。脊髄(せきずい)損傷で両下肢麻痺(まひ)となったことで、下半身を動かすことができず、車いすで活動している猪狩さんにお話を伺いました。

Q 復帰に前向きになった理由

A 事故に遭ってから、本当にたくさんの方に支えていただきました。私が仮面女子に復帰することができたのは「居場所があったから」「自分を必要としてもらったから」だと思っています。復帰後初ライブのとき、皆さんが黄色いサイリウムやフラッグを掲げてくださった景色は、一生忘れることのない宝物です。

Q パラスポーツ・バリアフリー 応援大使として

A パラスポーツやバリアフリーに興味関心を持つようになったのは、自分自身が障害を負ったからです。いまだに初めて知ることばかりです。また、障害のある方を思いやることができない人は悪気があるわ

けではなく、「知らないだけなのだ」と気付かされました。今後も自分の活動を通じてたくさんの人にパラスポーツの楽しさや、バリアフリーの大切さを伝えていく役割ができたら嬉しいです。

Q 著書に込められた思い

A 私は怪我をしてから、たくさんの方に「強い人だ」と言われるようになってきました。でもそんなことはなくて、過去にも今でも心が折れてしまふことが山ほどあります。そんな中でもどのように前を向いてきたのかを書きましたので、読んでくださった方に何か少しでもプラスになるといいなと思っています。

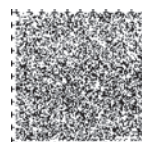
Q 今後の抱負

A 今年の冬に、所属している地下アイドルグループ仮面女子を卒業する予定で、個人活動になります。いただいたお仕事に全力で応えるのはもちろん、個人のYouTubeチャンネルでは好きなことをたくさんやっていきたいので、私の活動を見た方が



プロフィール

1991年12月9日生まれ。埼玉県出身。地下アイドルグループ仮面女子のメンバー。2018年から車いす生活を送っている。初の著書『100%の前向き思考 生きていたら何だってできる! 一歩ずつ前に進むための55の言葉』を発売中。12月12日ZeppHaneda 仮面女子ワンマンライブ開催予定。



猪狩 ともか(著)
発行: 東洋経済新報社

Q 皆さんへのメッセージ

A 私が突然の事故で車いす生活になっても活動を続けていられるのは、紛れもなく周囲の方々の支えや応援のおかげです。日頃から人に感謝することはとても大事だと、私は考えています。どんなときも自分に関わる全ての人に感謝の気持ちを忘れないで、一日一日を大切に過ごしてください。

障害のある人の人権

植草学園大学 副学長・教授
一般社団法人スローコミュニケーション 代表

野澤 和弘 さん

障害者差別解消法

障害者への差別は人種、宗教、政治体制、経済の状況にかかわらず、どの国でも起きています。そして、どの国も解決すべき社会問題として取り組んできました。

1990年に米国が障害者差別解消法(ADA)を制定してから、各国へと波及し、国連障害者権利条約へとつながった流れを見ればわかります。

日本は2013年に障害者差別解消法を制定、その翌年に権利条約を批准しました。世界で130番目。それだけ遅れていたといえます。

地域全体で考えて備えておく

法律ができればすべてが解決するというわけではありません。知的障害の人がコンサート会場に入れてもらえなかった、グループホームの建設に反対運動が起きる、といったことは今も時々耳にします。

法律が求めているのは、悪意のある差別の解消だけではありません。障害のある人が社会参加し、活動の機会を得るためには、何らかの配慮や調整が必要ことがあります。段差を解消するスロープやエレベーターがなければ車いすの人は参加したくてもできない場合があります。みんなと同じ場所においても、手話通訳や点字などの

情報保障がなければ耳の聞こえない人や目の見えない人は排除されているのと同じ状況かもしれません。

社会の側に過度な負担にならない範囲で、公的施設や団体にはこうした合理的配慮をする義務が法律に盛り込まれています。

しかし、災害や新型コロナウイルスなどの社会不安がある時には障害のある弱者はさらに窮地に立たされます。緊急放送が耳の不自由な人には聞こえない、避難所では手話通訳がない、人混みでパニックを起こしやすい自閉症の人が排除される、必要な薬が届かない……。ふだんから地域社会全体で考えて備えておくことが求められています。



プロフィール

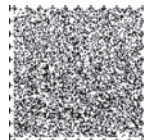
36年間毎日新聞で新聞記者・論説委員を務め、障害者や子どもの虐待など人権問題に取り組む。現在は植草学園大学副学長・教授。社会保障審議会障害者部会委員、障害者政策委員会委員なども務める。『障害者のリアル×東大生のリアル』(ぶどう社)『スローコミュニケーション』など著書多数。

多様化する社会のために

障害がなくても生きにくさを抱えている人は大勢います。障害者に配慮すると社会全体にもメリットが広がるのがよくあります。障害者のために開発されたウォシユレットのおかげで私たちも快適なトイレが使えるようになりました。知的障害のある人にもわかりやすいようなやさしい日本語を使うと、外国人労働者や外国からの観光客にも便利になるでしょう。

多様化する社会のためにも障害者差別の解消に努める必要があるのです。





ノーマライゼーションの実現に向けて

慶應義塾大学教授

中野 泰志 さん

当たり前を見直そう

普通のある場所にある普通の家に住み、朝起き、好きな服装に着替え、学校や職場に通い、友達や同僚と一緒に昼食を食べ、勉強や仕事が終わったら買い物や余暇を楽しみ、好きな人と一緒に生活する…。多くの人のとって、こんな普通の（ノーマルな）生活は、ごく当たり前に思えるかもしれませんが、しかし、こんなごく普通と思われるような活動をするために、苦勞を強いられる人たちがいます。例えば、聴覚に障害のある人は朝起きるときにどうしていると思いますか？ 身体に障害のある人はどうやって着替えをしていると思いますか？ 視覚に障害

のある人はどうやって電車やバスで通勤・通学していると思いますか？



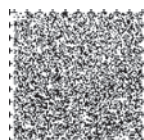
障害のある人たちのノーマルな生活を妨げるバリア

障害のある人たちが、普通の生活をしようとすると、様々な「バリア（障壁）」に遭遇する場合があります。主なバリアには、階段や段差等の「物理的なバリア」、点字や字幕等が用意されていないという「文化・情報面のバリア」、入試や資格試験等の受



プロフィール

国立特別支援教育総合研究所・視覚障害教育研究部主任研究官、東京大学先端科学技術研究センター・バリアフリープロジェクト特任教授を歴任。専門は、実験心理学、視覚科学、特別支援教育。博士（心理学）。著書に『新しい心のバリアフリーずかんきみの「あたりまえ」を見直そう!』（ほるぷ出版）、『ユニバーサルデザインみんなのくらしを便利に1〜3』（あかね書房）など。



ノーマライゼーションを実現するためには

験を拒否されるという「制度上のバリア」、避けられたり、差別されたり、偏見を持たれたり、「かわいそう」「気の毒」と同情されたり、下に見られたりという「意識上のバリア」があります。

ノーマライゼーションが目指す共生社会を実現するためには、これらの「バリア」を無くしていくこと（バリアフリー）が重要です。また、最初から障害のある人も利用することを考えるという「ユニバーサルデザイン」の発想も大切です。でも、最も大切なことは、すべての市民が、障害の本質を知

ることから始まるのではないでしょう。か。歩けなかったり、見えなかったりすることが障害なのではなく、歩けない人や見えない人たちのことを考えずに、建物・製品・制度・サービス等の社会システムを作ってしまったことが障害（社会的障壁）なのです。障害のある人たちは、この社会的障壁があることで、日常生活や社会生活に困難を感じたり、人権を侵害されたりしています。ノーマライゼーションを実現するためには、市民一人ひとりが障害の本質に気づき、共生社会を実現するために具体的な行動を起こし続けるということが大切です。ぜひ、「誰一人取り残さない」社会を目指していきましょう！

コロナ禍であぶりだされた 障害者支援の家族依存

一般社団法人日本ケアラー連盟

代表理事

児玉 真美 さん

家族ケアラーは

ただの「介護機能」？

今年3月末に埼玉県で日本初の「ケアラー支援条例」ができたことを、読者の皆さんはご存じでしょうか。ケアラーとは、家族などを無償で介護している人のことです。なぜ、このような条例が必要なのでしょう。

日本では介護は家族がするものという社会規範が強く、特に障害児者支援では医療・福祉・教育のすべてが家族に依存してきました。家族はまるで病

まない・老いない・衰えない「介護機能」であるかのように、支援の対象外に取り残されてきたのです。

コロナ禍で追い詰められる 障害のある人と家族

そうした「家族依存」はコロナ禍でも障害のある人と家族を追い詰めています。日本ケアラー連盟が3月にケアラー緊急アンケート（有効回答378）を行ったところ、困っていることとして挙げられたのは、

「マスク・消毒液などが不足している。
手に入らない（70.4%）」

「ケアラー自身の精神的負担・ストレス
が増している（55.8%）」

「ケアラー自身の身体的疲労感が増し
ている（33.3%）」

「介護・福祉サービス等が足りない・頼
みにくくなった（20.4%）」。



プロフィール

フリーライター。長女に重度重複障害がある。
『海のいる風景』『殺す親 殺させられる親』（生活書院）『私たちはふつうに老いることができない』（大月書店）ほか著書、訳書多数。

障害のある人も家族も

自分らしく暮らせる社会に

障害のある子どものケアラーでは、臨時休校のためケア時間の増加が顕著でした。また9割を超える人が、ケアラー自身が感染した場合に介護の代替策がない状況に置かれていました。自由記述には、「もしも」の時を考えると恐ろしい「途方にくれます」などの言葉が並びます。

この結果を受け、日本ケアラー連盟では「もしも」の時にケアが継続されるよう重要情報を取りまとめておける「ケアラーのバトン（緊急引継ぎシート）」を作成しました。

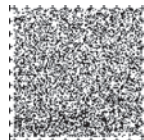
連盟HP

(<https://carersjapan.jimdofree.com/>)

「新型コロナウイルス関連」ページからダウンロードできます。

しかし、このバトンを受け取ってくれる社会の受け皿は、まだまだ不足しています。コロナ禍は、平時からの「家族依存」の矛盾と限界をあぶりだし、した。緊急時はもちろん親亡き後にも、障害のある人が家族から離れて十分な支援を受けながら安心して暮らせる受け皿が整備される必要があります。そして、埼玉県の条例が明記するよう、ケアラーにも「個人として尊重され、健康で文化的な生活営むことができるように」支援が必要なのです。





ドローンでチャレンジ (障害のある人)の就労促進を!!

社会福祉法人プロップ・ステーション 理事長
ユニバーサル・ドローン協会 事務局長

竹中 ナミ さん



プロフィール

1948年兵庫県神戸市生まれ。神戸市立本山中学校卒。重症心身障がいの長女(現在47歳)を授かったことから、独学で障がい児医療・福祉・教育を学ぶ。1991年、草の根のグループとしてプロップ・ステーションを発足、98年厚生大臣認可の社会福祉法人格を取得、理事長に就任。ニックネーム「ナミねえ」で親しまれている超元気な関西人。2008年より「ナミねえBAND」を結成し、ヴォーカリストとしても活動中。著書に『プロップ・ステーションの挑戦』(筑摩書房)、『ラッキーウーマン〜マイナスこそプラスの種!』(飛鳥新社)がある。

就労促進に向けて

チャレンジの就労促進、職域の拡充を願って、プロップ・ステーションの活動を30年間続けてきた私(ナミねえ)が、「ユニバーサル・ドローン協会(UDRA)」を設立したことで、出会った人たちから「なんで?!」と聞かれるんやけど、私の中では「パソコンの次はドローン!!」と確信しています。

ドローンが担う役割

「官邸の屋上に落ちた!」というニュースから世間に知られたドローンは、その後も何となくネガティブなイメージでニュースに取り上げられることが多いんやけど、映画やTVなどのドキュメンタリーで、息を呑むほど美しい、あるいは壮大な自然の映像が流れるとき、その映像の殆どが今ではドローンで撮影されているといっても過言ではありません。

海や山での遭難における人命救助、混雑する陸路を避けた貨物の輸送、田畑への農薬散布や地域の安全管理など、ドローンが担う役割はますます増えています。

仕事の道具としてだけでなく、自分自身がまるで鳥になったかのように空中を舞い、空から様々な風景を眺める楽しさは、趣味としても素晴らしい体験が得られます。

ドローンの需要

三田市の農家のグラウンドでドローン講習会を毎週開催しておられる三田ドローン研究会をネットで見つけた私は、すぐさま出向いて主宰者の高橋孝明さんに弟子入り(笑)させていただきました。

高橋さんは、設計事務所を経営される技術者であり、街づくりやプラント設計など実務にドローンを使っておられるだけでなく、性格も大変ストイックな方です。約1年間「三田ド

ローン研究会」で学ばせていただいた後、ドローン技術でチャレンジの職域を広げ、就労を促進するための非営利組織「ユニバーサル・ドローン協会」の設立と会長就任をお願いしました。

今では国交省、兵庫県、神戸市などから認証をいただき「神戸しあわせの村」で「チャレンジドローン講習会」を定期的に開催しています。

講習会では、足でドローンを操縦する中学生や全身麻痺のため声でドローンに指示を出す方、写真を撮ることが大好きな発達障害の青年たちが、生き生きとドローン技術の習得に励んでおり、新聞で活動が紹介されると、新たなチャレンジ受講生も増えました。

これからもますます増えるドローンの需要に、チャレンジとともに応えていけるよう頑張りたいと思う、ナミねえです。

ユニバーサル・ドローン協会
公式サイト <https://udra.jp/>

映画紹介

『ジョゼと虎と魚たち』

恋愛小説の名手田辺聖子さんの短編が、現代の若者達を主人公にアニメーションになって蘇りました。

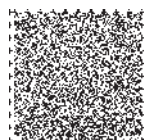
海洋生物学を専攻する大学生の恒夫は、坂を転がり落ちてきた車椅子のジョゼを助けたことから、彼女に付き添い、注文を聞くというアルバイトをすることになります。祖母と家に籠り、その日暮らしで生きてきたジョゼはわがままな要求で恒夫を振り回しますが、夢に向かって頑張る恒夫に刺激を受け、絵で生計を立てたいという淡い願いを抱くようになります。しかし障害者にとっては生活を維持していくことが難関であり、祖母の収入に頼ってきたジョゼにも夢見ることさえ容易には許されない現実が待っていました。恒夫はジョゼに外の世界や夢を追う人生を教えました、彼女の生きづらさを理解できてはいなかったのです。そして悲劇が起こります。

私達は人と接するとき、どこまで相手の身になって考えることができるのか。きらきらした恋愛を描きながらも、鋭い問いを含んだ作品です。



©2020 Seiko Tanabe/ KADOKAWA/ Josee Project

■原作:田辺聖子 ■監督:タムラコタロー ■配給:松竹/KADOKAWA
■製作:「ジョゼと虎と魚たち」製作委員会 ■12月25日から神戸国際松竹で公開 ■お問い合わせは、078-230-3580



拉致問題の解決に向けて

拉致問題は現在進行形

新潟産業大学 准教授 蓮池 薫 さん

救出しなければならぬ

「拉致問題を風化させてはならない」という話をよく聞きます。その通りだとは思いますが、よく考えてみると、歴史的な事件や災難について将来の教訓として忘れてはならないという意味で使われるのが、「風化させてはならない」という表現でもありません。

しかし、拉致問題は過去の事件や問題ではなく、またそこから教訓を学ぶだけの問題ではなく、今まさに被害者を救出しなければならぬ、緊急を要する現在進行形の問題です。

拉致問題と人権

北朝鮮当局は2002年平壤を訪問した小泉首相に拉致被害者の安否について、13名のうち8名が「死亡」と伝えまし

た。これを伝え聞いた家族は、絶望されましたが、そこには何の根拠も示されていないことに気づきました。

その後、日本側の要請によって北朝鮮当局が提示してきた「根拠」は、どれも信ぴょう性がないものばかりでした。「死亡報告書」に書かれた「死亡時期」に私たちと同じところに住んでいた方もいれば、出された「遺骨」が偽物と判明した方もいます。家族が「死亡」として受け入れるに足る確たる証拠が全くないわけですから、生きているという確信のもとさらに活動に取り組んでいくのは至極当然のことです。

拉致問題だけではなく、人権にかかわる問題は、急を要するものばかりです。今まさに命の危険にさらされたり、想像を絶する苦痛に耐えたりしながら暮らしている方々を救うのが目的です。そういう意味で人権問題では何よりも行動が求められるのではないのでしょうか。

プロフィール

1957年新潟県柏崎市生まれ。中央大学法学部3年在学中に拉致され、24年間、北朝鮮での生活を余儀なくされる。帰国後、1年間の市役所勤務を経て、新潟産業大学嘱託職員・非常勤講師として働く。中央大学に復学。2005年には初の訳書『孤将』を刊行。2008年3月 復学していた中央大学卒業。2013年3月 新潟大学大学院博士前期課程 修了。2013年4月 現在 新潟産業大学経済学部 准教授。訳書、『ハル 哲学する犬』『私たちの幸せな時間』『トガニ』など20数冊。著書、共著1冊を含め、5冊。うち2009年6月刊行の『半島へ、ふたたび』（新潮社）は新潮ドキュメント賞を受賞。2012年10月に『拉致と決断』（新潮社）を刊行。

一つにすること

拉致問題解決の本質は、人為的に引き離された家族を再会させ、一つにすることです。しかし、被害者の親は今だけでなく有本恵子さんの母嘉代子さん、横田めぐみさんの父滋さんが他界され、現在はお二人しか残っていないらしいです。「拉致被害者を全員返して新たな日朝関係を築いていこう」という北朝鮮当局への呼びかけに、ぜひとも多くの方に合流していただければと切に思います。



県警からのお知らせ

兵庫県警察では、北朝鮮当局による「拉致被害者」の有本恵子さんと田中実さんに関する情報や、「拉致の可能性を排除できない行方不明者」の方々に関する情報提供を求めています。

お心当たりのある方は、兵庫県警察本部外事課まで情報をお寄せください。皆様のご協力をお願いします。

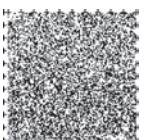
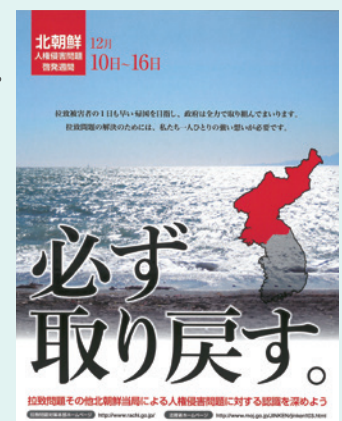
詳しくは、兵庫県警察ホームページをご覧ください。

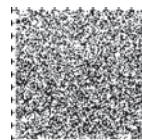
■兵庫県警察本部外事課

代表電話 **078(341)7441**

詳しくは、**兵庫県警察拉致問題**

検索





12月4日～10日は

人権週間です!

みんなで人権を考えよう

人権のつどいを開催 YouTubeにてライブ配信を行います。

日時 12月2日 13:30～

視聴方法 YouTube「兵庫県人権啓発協会」チャンネルから視聴できます。

YouTube兵庫県人権啓発協会

検索

なお、配信動画は、アーカイブで令和3年3月末まで配信する予定です。



INAC KOBE
SINCE 2001

©INAC 神戸

わたしたちも
“人権文化をすすめる
県民運動”を応援
しています!



HANSHIN
Tigers

©阪神タイガース



のじぎく文芸賞の入賞者が決定



令和2年度ののじぎく文芸賞には、1,614点(一般の部440点、学齢児童生徒の部1,174点)の応募がありました。審査の結果、下記の通り入賞者が決定しました。12月2日(水)の「人権のつどい」(13:30～兵庫県公館)で表彰式を行います。作品の一部を本誌で紹介するほか、最優秀・優秀作品は当協会のホームページにも掲載します。

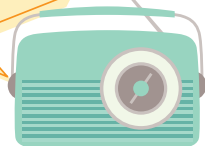
賞名	部門	部	作者名(敬称略)	作品名
最優秀賞	小説	一般	稲見 臣二	蒼空のかたへ
	随想	一般	東条 幸一	この思いが届きますように
	詩	一般	吉村 隆	あ、い、う、お
	創作童話	一般	山崎 祐二	ある晴れた日の風景
優秀賞	小説	一般	先間 美保子	いつかあなたが見る景色
		学齢	加藤 奈乃葵	過ち、償い
	随想	一般	陣内 和美	誰もが大切にし合える社会へ
		学齢	松田 和佳	群れるということ
	詩	一般	大恵 やすよ	傘
		学齢	北尾 天珠	ぼくは、ここにいるよ
	創作童話	一般	藤本 忍	花咲かばあちゃん
		学齢	該当者なし	—

*学齢 = 学齢児童生徒(中学生以下)

ラジオ関西

「谷五郎の笑って暮らそう」

(毎週火曜日10:00～13:00)で、12:35頃から「きずな」の記事等を紹介しています。



点字図書館へ行ってきました。点字図書や音声図書などがあり、視覚障害者の方等の読書環境について知ることができました。

きずな12月号P3は点字版を1月に発行します。各県民局、市町、図書館などに配布していますので、ご活用ください。



「きずな」は、協会ホームページからもご覧になれます。

兵庫県人権啓発協会

検索



(公財)兵庫県人権啓発協会
〒650-0003 神戸市中央区山本通4-22-15 県立のじぎく会館内
TEL 078(242)5355 FAX 078(242)5360
info@hyogo-jinken.or.jp

